

これはどうですか 村上春樹『風の歌を聴け』・『1973年のピンボール』 講談社文庫で読める

1 **村上春樹**（1949年1月～）：作家。京都生れ、兵庫県芦屋の育ち、神戸高校から一浪後早稲田大学第一文学部（演劇学科）に進む。学生結婚をする。ジャズ喫茶を経営。大学卒業後1979年『風の歌を聴け』で群像新人賞。その後次々と作品を発表、日本で最も売れている作家の一人。世界でも売れている。代表作『風の歌を聴け』『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』『ノルウェイの森』『ねじまき鳥クロニクル』『海辺のカフカ』『1Q84』『騎士団長殺し』『街とその不確かな壁』など。ノンフィクション『アンダーグラウンド』『約束された場所で』、翻訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』『グレート・ギャツビー』などもある。紀行文（ヨーロッパ滞在記）『遠い太鼓』『雨天炎天』などもある。

2 **『風の歌を聴け』**：初出は『群像』1979（昭和54）年6月号。群像新人賞受賞。

村上春樹のデビュー作と言われる。語り手「僕」は村上春樹自身と同年で1978年に29才。語られる舞台は8年前の1970年、当時語り手は21才。兵庫県芦屋市（神戸の東隣）が実家で、都会の大学に通っているが、今は夏休みで芦屋に帰省している。芦屋は高級住宅街で金持ちが住んでいる。「僕」が金持ちかどうかは書いていない。「僕」は友人の「鼠」とジェイズ・バーで交遊する。「鼠」は金持ちの子で、金持ちを嫌い、作家になろうとしている。

この小説は、紹介しにくい。いくつもの要素が出てくるが、それらが十分説明されないまま終わるからだ。説明をあえて拒否しているのかもしれない。だが、面白い。非常に魅力のある世界が展開されている。

冒頭で「僕」の、言葉では十分なことが語り得ない、という絶望感がまず述べられる。「僕」は8年間沈黙してきた、と。だが、今、「僕」は語り始める。言葉で語ることに安易に期待は出来ないにせよ、それでも語ろう。「うまくいけばずっと先に、・・・救済された自分を発見することが出来るかもしれない。・・・その時、・・・僕はより美しい言葉で世界を語り始めるだろう。」この小説は村上春樹の文学世界の言わば出発点だ。村上春樹は、その後、十分な言葉を紡ぎ、「救済された自分を発見」し「より美しい言葉で世界を語り始める」ことができたのだろうか？

### \*登場人物

「僕」：芦屋出身、都会の大学生。生物学専攻。夏休みで芦屋に帰省し、「鼠」たちと交流している。

「鼠」：芦屋の金持ちの子。金持ちを嫌っている。作家になろうとしている。何かで悩んでいる。（「鼠」というキャラクターは、『1973年のピンボール』『羊をめぐる冒険』にも出てくる。）

「ジェイ」：ジェイズ・バーの男性。中国系。

「左手が四本指の女の子」：ジェイズ・バーで「僕」が出会った女の子。レコード店店員。「僕」と仲良くなるが・・・「みんな大嫌いよ」と泣く。

「僕」の回想に出てくる女の子たち：（1）高校時代の彼女。別れた。（2）新宿のヒッピーの女の子。街で拾ってきたが、出ていった。（3）大学の仏文科の学生。自死した。

デレク・ハートフィールド：アメリカの作家。「僕」が多くを学んだ相手。NYで飛び降り自殺。（実はこの人物は架空の存在。）

\*コメント：「僕」の叔父の一人は中国大陸で死んだ。「僕」はデモやストライキで機動隊員に前歯を折られた。題名『風の歌を聴け』も、ボブ・ディランの歌「風に吹かれて」の含みがあるとすれば、公民権運動や核時代を読者に連想させる。この小説には、戦争や学生運動が影を落としている。だが、それらはほとんど語られない。中国系のジェイは言う「でもみんな兄弟さ。」「僕」も言う「もうみんな終わったことさ。」「僕」は生物学専攻で、2ヶ月で36匹の猫を殺す。「僕」は残酷な背景を持っている。「僕」は大学仏文科の彼女を失う。これについては「もう終わったことさ」とは言わない。大きな痛みを持ちながら「僕」は暮らしていると思われる。何らかの事情で傷ついた「左手が四本指の女の子」を「僕」は介抱する。結局彼女は街に消えていく。「僕」は無力だ。後日談で「僕」は結婚し東京で暮らしていることが語られる。失われた過去の上に辛うじて現在がある。過去と現在のあ

やういバランスの上に今がある、と言うべきか。過去を完全に忘却してはいない。こうして語り出しているのだから。だが、これからどう語りどう格闘していくのか。それは次作からのお楽しみ、ということだろう。(注1)

(注1) 後年の村上文学全般については、様々な要素を配置し読者の想像力を喚起するのが巧みだと絶賛する人もある。他方、歴史と女性を抹殺するものだ、と厳しく批判する人もある(小森陽一など)。(R5.6.25 安井)

### 3 『1973年のピンボール』: 初出は『群像』1980(昭和55)年3月号。

『風の歌を聴け』に次ぐ作品。語り手「僕」は1979年現在30才。「僕」は過去を語る。

1973年。語り手「僕」は東京で翻訳の仕事をしている。金持ちの青年「鼠」はおそらくは関西の海辺の街で暮らしている。「僕」と「鼠」の二つの物語が平行して語られる。二人は1970年の出来事の痛みを引きずっている。

(以下ネタバレあり。) 1969年、「僕」には直子という恋人がいた。だが、1970年、直子は死んでしまう。喪失感をかかえたまま「僕」は大学を出て、東京で働き始める。1970年の春、「鼠」は大学を中退した。1969年は大学紛争の年だが、それは多くは語られない。今は海辺の街でジェイズ・バーに通いながら無気力に暮らしている。海の近くに彼女の住むアパートがある。「鼠」は彼女と霊園で過ごしなが、哀しみを抱いている。

「僕」の部屋には双子の女の子が転がり込む。「僕」は双子の女の子と楽しく暮らし、翻訳の仕事は成功、職場の女性にももてている風情だが、それでも心中には大きな喪失をかかえている。かつて熱中した旧式のピン・ボールを探し出し対話する。そこは郊外のきわめて寒く冷たい場所だった。これは死んでしまった直子と死の世界で対話したことのメタファーだろう。「僕」は直子の死の世界を離れ生の世界へと戻る。双子の女の子は、「もとい世界」へと帰っていく。

「鼠」は閉塞感を打破できず死を選ぶ(と暗示されている)。

「鼠」は言わばもう一人の「僕」だ。「鼠」は死ぬが、「僕」は生きる。「僕」は直子と死の世界で対話し、生の世界に戻る。生は死と隣接しているが、それでも辛うじて生を紡ぎ出していく。そういうことだろうか?

#### \*登場人物

「僕」: 1970年に恋人の直子を失った。「暗い穴の中で」過ごすような気分でピン・ボールの呪術の世界に入り込む。痛みを抱えたまま東京で翻訳業をして生活。

「直子」: 「僕」のかつての恋人。亡くなった。(『ノルウェイの森』の女性も直子。)

「鼠」: 金持ちの子。大学を中退し海辺の街で無気力に暮らしている。彼女がいるが・・・(『風の歌を聴け』にも「鼠」が出てくる。似たキャラクター。)

「鼠」の「女」: 「鼠」の彼女。海の近くのアパートに住む。

「髪長い少女」: 「僕」の学生時代のアパートの住人。陰気な感じのする顔立ち。沢山の電話がかかってくる。あるとき「寒くって死にそうなのよ」と「僕」に訴えてくる。大学をやめて故郷に帰る。この少女はなぜ出てくるのだろうか? 誰もが寒々とした思いを抱きつつ都会で孤独に暮らしている、その典型ということか?

「双子の女の子」: 「僕」の部屋に転がり込んできた双子。この双子がラストで「もとのところ」に帰るとは、どういうことか? 双子は、死に引きずられる「僕」が、生を引き受けることを選ぶまでの言わば助け手のような存在として出現していたのか? それとも、双子が去り、「僕」が一人取り残されることを重ねて示しているのか?

「事務員の女の子」: 翻訳事務所の女性。よく働く。

「ジェイ」: 恐らくは関西の海辺の街の、ジェイズ・バーのマスター。中国系。(『風の歌を聴け』にも出てくる。)

「ピンボール・マニア」: 大学のスペイン語の講師。「僕」を郊外のピン・ボールの墓場のような世界に案内する。

\*その他: 大江健三郎の『万延元年のフット・ボール』をもじった題名だ。大江の場合は「谷間の村」での社会運動と挫折を描くが、村上の場合はあくまでも個人の問題にフォーカスしている。もちろん背景に時代社会の問題はあるのだが。